

蒙古驛傳考

十三世紀に於ける蒙古族の活動は、世の等しく驚嘆するところ、而して學者の其原因を説くもの、一に其武力に
よるとなすものにあらされは、則ち其生活状態よりして、懸軍長驅の易々たるによるとなす、然も古來屢々支那を
擾たり、西方諸國を侵したる塞北民族の多くは、其武力に於て蒙古族としかく徑庭あるものにあらず、生活の状態
もまた異るところ多からず、而して其功業の間、至大の懸隔の存するに至りては、吾人は尙ほこゝに諸種の事情を
數へ得へきを思ふ、彼等の諸般の施設の上に、多くの文明的要素を備ふるものは、實にまた之か至大の因由たりし
を疑かはす、此の如きは種々の方面に於て之を認むべく、征服を重ねるの間、屬地の支配には一定の法規あり、軍
隊には新式の組織あり、武器は時に従かひて改良と工夫とを凝らし、社會の間には上下各々其位によりて事を處す
るの秩序あり、若しそれ外國の文明にして彼等の見て以て可なりとなすものに至りては、之か模倣輸入に勉めたる
の跡、歴々として認むるを得へし、此の如くにして彼等本來の文明と漸次招致せられたるものとは、相合して能く
其の偉業を完成するの基を成せしか如し、驛傳の如きもまた其の制を支那にとりて、夙やく國內に施設せる處にし
て、彼等の功業に尠なからざる助けを成せしを見る、以下其創始の有様よりして漸次如何に之か發達し、而して如
何に重要な位置を占むるものなりやの一斑を窺かはんとす、篇を別ちて二となすもの、一は漠北時代之か創始の